



911.3

八



きつろくはなるか 乃 終をあやとり ねさむれハ又くあさ炭
 のちみ ころりころり なる 題号とつく 廿付るふハ
 詩乃正々成よりつる五ツのちかひるにやまのまへ乃ぬ
 らひよハちねて例のちふ何やころるあハ八篇より
 西あつころるあつころりひころる 昔 昔 旅ち乃そ 途より
 やりしれころるを 換く 再々乃 終を 終ころり けま乃 終の
 りふあころるの 終ころり 乃 終まう 大 桶の 終ころり 終
 炭乃ぬ 奇ころり ころり ころり ころり 山 灰の ぬり ころり
 ハ 柳也 ころり 杜 ころり ころり 飯 小 子 び ころり ころり ころり ころり
 ころり ころり 此 志 ころり ころり ぬ 婦 ころり ころり ころり ころり ころり
 序 終 ころり ころり ころり ころり ぬ ぬ ころり ころり ころり ころり ころり ころり
 終 ころり 終 ころり ころり ころり ころり ころり ころり ころり ころり ころり

元禄七年夏同日壬子卯三日

むゆぐれのつと日乃物る山強水

芭蕉

変くは狩子乃 帰一と所

芭蕉

家重と後とまのてまよとく其

全

上乃多ううにあらる茶乃虫

芭蕉

宵乃口しとくしとくし月の雲

全

藪哉とあひあふ乃とくし

芭蕉

法政と菓りしとくしあわくは

芭蕉

始と望し人しあは歩ぬ

芭蕉

芭蕉

素良うしおあしとくし細基子

芭蕉

こしとくしハ百乃物ぬとくし

芭蕉

影けしとくしみとくしとくし向の窓

芭蕉

りしとくしつひ物ぬとくし

芭蕉

浴衣有尼の持扇とくし

芭蕉

こんはや九をうり煮とくし

芭蕉

たの川下は舞舞とくし

芭蕉

赤狐おもしろ居合ひとくし

芭蕉

町尻乃にけらりと碇とくし

芭蕉

門く押あし壬子乃念佛

芭蕉

赤風とくし雲乃いまを吹す

芭蕉

多く居るすん眩とわたりぬ

芭蕉

けすの月右むらさき
 こはらもりれしと白とつらね
 方くは十萩乃月さゆの春
 相の本もく月さゆの春
 門吉りて多まつはゆら面をけ
 日らつて今も表うくすふ
 こつ午よ女房乃おやて振舞て
 又このそよまへゆぬ穿人
 法平乃湯治を送る花さうり
 なハもと下りてまきまの虫牙
 どの家も茶の方不窓とあり
 奥り喰へくそ虫乃難炊
 芭蕉 舟坡 芭蕉 舟坡 芭蕉 舟坡 芭蕉 舟坡 芭蕉 舟坡

子とつ啼一船くまをうかり
 未を乃る乃不しぬか母用
 遠へ去まへせん娘とれ又ま
 屏風の陰下りみゆる益
 舟坡 芭蕉 舟坡 芭蕉

三吟

兼好覚 庭感かりまはかり
 あさみや 荻下り 花翁考る
 序乃ままの少飯乃りてやうて
 奇ききやくに困り相撲場
 弱くは難自ころの春乃月
 子稀も世駒老おしれ知の
 舟坡 芭蕉 舟坡 芭蕉 舟坡 芭蕉 舟坡 芭蕉

嵐雪

深とまよ流子のそらん
ありそらけれを色たえり
隣りそら嫁と作まよふ
てりくくも答るのりわり
愚に谷乃九ちハは誘を護成
五百のうけをう度にまたり
綱ぬき此のボの流あるまは
人のさかぬま悪むあり
難及乃難を下せんむうのれ
飯を中ふる。芋とわりの
湖と雨降やまて秋の風
新ぬみてハ又新うく

流者
利半
世破
流者
利半
世破
流者
利半
世破
流者
利半
世破

名

古公乃あうし全形を妻めりて
抱揚る子の小俊とまよ
くりくくと河月乃を拙送る
心みくか一第乃せん多く
婿う身く娘の世をまはり
こくく乃あれハ行も唯りぬ
至佛の御文は長とまよるん
けういわいの小名とまよる
泰乃徳ハ跡くは風を吹倒さ
る場乃喧囂め終るす月
者ハとまよくはて人にある
今耳に居やまらるる

流者
利半
世破
流者
利半
世破
流者
利半
世破
流者
利半
世破

賣のくうつてんをたて
ゆゑしとゆふのうら
備倉乃使きをたたら
うしとま乃あねぬ細引
世ある母とすくま乃
おこくひ残る四月の録

芭蕉

利半

世坡

茂若

利半

世坡

ふく川よさうりて

孤居

倉屋乃記さきたり夏の縁
登乃くう鶴のくう藤川
上法と通さぬけの雨つて
つと乃をけん保乃宛中

芭蕉

世水

利半

庭のよはれもわくはぬ宵の月
とくうとと塚乃こころは秋風
あうくは薪乃下らり明切
晩のけさ乃ユまよりのじ
婿をよあうく考うくは
信那のいこまらうとを
風ゆうお明うはる帰れり
家のあう水と記とらんよ
銀けいん希うくくわんて
茶の突るをよけく考うは
このまゝハまうやう考う
うら 抑 成 今 亦 耳 して

芭蕉

孤居

利半

世水

孤居

芭蕉

世水

利半

芭蕉

孤居

利半

世水

君乃能吹スウシヨク樹乃
 子ノ人カクモメ物ハカ
 不カ重カ際ト申乃ワカ
 今何カ坊主ト上入ア
 信ノ申カハカカカカカ
 至リカカカカカカカカ
 君ノ申カカカカカカカ
 今カカカカカカカカカ
 今カカカカカカカカカ
 息カカカカカカカカカ
 堪カカカカカカカカカ

孤屋 芭蕉 借水 利牛 孤屋 借水 利牛 孤屋 借水 利牛 孤屋 借水 利牛

名月カカカカカカカカ
 今カカカカカカカカカ
 今カカカカカカカカカ
 山乃根際乃 証カカカカ
 今カカカカカカカカカ
 眺カカカカカカカカカ
 今カカカカカカカカカ
 余乃カカカカカカカカ

芭蕉 孤屋 借水 利牛 芭蕉 借水 利牛 芭蕉 借水 利牛

百韻

芭蕉 孤屋 借水 利牛
 各九句

子と保又去して是に早苗
家の心もこのまゝに
而もこれ保救靈婦の
と刀町と云ふ上西の
竿竹不承安乃他た
るに離れし人受
善乃舟干差乃茹汁
掃丈波の檀
ぢやい舟と云ふ
坊主に
松坂也矢川
此の脈も

利半
世波
孤危
利半
世波
孤危
利半
世波
孤危
利半
世波
孤危

十二三年乃
本堂付
日乃
長奇
近
天
特
株
市
此
ほ
ほ

利半
世波
孤危
利半
世波
孤危
利半
世波
孤危
利半
世波
孤危

才ハ神聖妙何ニ及ルヲ抑テ

棄明ハ棄テテ人ハ保

形ニテ西ニ成テ力高ク志

尚求テテ今ニテ大野

如蠶ノ喰テテ柱ニテ

之ニ細ニテ仕使廣庭

瘧且シテ今ニテ今ニテ

故テ今ニテ今ニテ今ニテ

己ニ世ノ為ニ今ニテ今ニテ

今ニテ今ニテ今ニテ今ニテ

今ニテ今ニテ今ニテ今ニテ

今ニテ今ニテ今ニテ今ニテ

犁

坡

孤

犁

坡

孤

犁

坡

孤

犁

坡

孤

此ノ事ハ血ニテ今ニテ

今ニテ今ニテ今ニテ今ニテ

伐透ハ柳ノ橋ノ才ニテ

今ニテ今ニテ今ニテ今ニテ

後ニテ今ニテ今ニテ今ニテ

牌立ヒ丘尾ノ風ノ才ニテ

蘇橋ノ柱ニテ今ニテ今ニテ

天橋ノ柱ニテ今ニテ今ニテ

廣徳ニテ今ニテ今ニテ今ニテ

今ニテ今ニテ今ニテ今ニテ

驚テ今ニテ今ニテ今ニテ今ニテ

十ニテ今ニテ今ニテ今ニテ

犁

坡

孤

犁

坡

孤

犁

坡

孤

犁

坡

孤

存花子のきりしゆのほろろ
 弦子鹿海重しと係挿
 二 棧曝徒ういこをなす記より
 小豆をなすら乃や静し
 楓端の静しを足とかけ出で
 一 酒乃徳うけを急合てん
 麦畑の習作を海に傳ふ杭
 賣子も志しん 折段の事
 抱ふも子持よりれたるふふ
 又此扇の古景いしし
 妓まをなすうよよれた二そ徳
 多き古きししと静ししよりり

利牛 孤屋 世坡 利牛 孤屋 世坡 利牛 孤屋 世坡

一 つくちりし 徳乃平 獨
 沙所しは 蘇引ちきり 於乃内
 たよめすよよの 赤の海あふ
 めと纏く 雲智よゆり 晴の雲
 又たのみしして 又懐たよりき
 かきとれたすの 己れ息をまつと
 入来る人す 味さる豆と初ん
 ちちうのよ 赤海給乃 我田川
 内葉屋乃 ぬゆの 岩乃 ち海さ
 けちくしとんと ぼくす 重たれ
 あり葉よ 録よりし 煮汁

利牛 孤屋 世坡 利牛 孤屋 世坡 利牛 孤屋 世坡

空乃口引戦く居る様 不
 尻野くけく 凶くはやく
 ありくくくくく 時乃る乃る
 入毎つく内 乃六内
 拭くくお 以の愛居ひく
 常云つもの 細くくく
 大乃乃ありく 細乃あつて
 何年 善執く 善執乃真
 交々くく 同心乃あくと 延
 九九十日 湿をわりく
 投市くくく 延くくく
 延くく 延くく 延くく

利牛 孤屋 毘波 利牛 孤屋 毘波 利牛 孤屋 毘波 利牛 孤屋 毘波

里離れ 野引乃わくく
 やくくくく 野の 野の
 善くく 朝日まの 精進者
 くんち 居くく 八まの
 丁 寧く 仙まの 儀乃口く
 所 弘く 縁く 土く なる 篇
 夕内く 醫名乃 名まの 中く
 白て 居る 延乃 やきく
 空 先と 今 年 者 延く 欲く
 月 中 や 住 事 年 者 延く 欲く
 四月 ぶく くる 延く 延く

利牛 孤屋 野坡 利牛 孤屋 野坡 利牛 孤屋 野坡 利牛 孤屋 野坡

減もさぬ瀬路をのりて乃存
川建並は所乃相波
彼岸を乃花の咲きく
二人をさうりりるよま

利半
孤舟
舟波
花岸

春之部 飛白

主 主

蓮葉もよみさそや浮舟乃初
あやもやまのうらたそら
みらりの乃乃園越の末の
まや初小舟波末麻も
乃乃は供もつまそ

蓮葉
舟子
帆風
京
玄末
葉
心秀

いとくきまを雀乃かきそ
喰つるや亦多の欠をひの
移いまき門徒指まは
目下にも中乃河や年
初月新の堂立もつ
そ松の親のなをく
梅
梅一本つるさ
ひめ暖や向乃
かめらるまは
むろりるや

西堂
御水
花園
孤屋
利半
舟波
花活
曲架
麦考
伊勢
去芳

梅咲く湯後乃崩き
 赤みそ乃只を角りり
 みましくし候うわりの
 紅車を娘すまはる
 世ふこも乃七
 七重や後ひさしけく
 くらわねく若菜摘
 浴衣乃え乃
 勝月一足つり
 大くくや
 かわら内ちこと

利牛
 遊刀
 世披
 杖丸
 其角
 世披
 仙杖
 玄来
 文茶
 仙花

深川乃まき

長字さやを乃抄くも
 十又月ま中睡月乃
 猫乃く糸初より
 ねこの子乃らんつ

利牛
 文茶
 世披
 其角

雪

うらみ書はほくと
 常ふ茶と人ん夢
 うらみはの夢に
 うらみは十門
 号れり夢も

世披
 其角
 世披
 利牛

柳

こねりまゝにして植へ折成
陸まごてし月めきひうん柳うぬ
又人あそりて去りて柳うぬ
せきまゝ乃尾ひん舟さる柳うぬ
町なうへ去りて宿乃柳うぬ
傘は押わたるるる柳うぬ

孤屋
湖春
曲登
嵐堂
支考

椿

土をろふ籬はちり辺松うぬ
杖長く伐らぬを椿うぬ
念乃くまううつはむ松うぬ
篠乃くまううつはむ松うぬ
さのぬも松うぬ

孤屋
湖春
曲登
嵐堂
支考

いよ挿條をさるる松敷にうぬ
母城

花

ふ人の花をさるるうぬ
糸寺はらふりのまふくはうぬ
かろうらうらうらうらうぬ
四のこまきうらうらうぬ
うらうらうらうらうぬ
うらうらうらうらうぬ

孤屋
湖春
曲登
嵐堂
支考

中下もりれあはな乃ふんふ
ささやうらうらうらうぬ
柳うぬ乃湯をけし藤やうぬ

孤屋
湖春
曲登
嵐堂
支考

あまのつとむえの雪乃乃九さき
 たうれても母のこゝ いまのつとむえ
 枚の雪 湖 雪 ゆをり 雪乃乃花の中
 牡丹とく人もの雪をえとハさぬ
 あまのつとむえとたはま 五 叔のさう
 雪乃乃も毛 虫にあ い 家 楳
 やまのさぬ い ちりや 小川乃乃車
 老 信も 雪 雪 雪 雪 雪 雪 雪 雪
 雪乃乃 い 雪 雪 雪 雪 雪 雪 雪 雪
 山 楼 小川 雪 雪 雪 雪 雪 雪 雪 雪
 混 命 い 雪 雪 雪 雪 雪 雪 雪 雪
 雪乃乃 い 雪 雪 雪 雪 雪 雪 雪 雪

荊口 斜嶺 北枝 湖春 其角 光堂 智月 大石 之石 結甫 普全 利半 二

折くくも 橋て少くや 雪所
 食乃乃 舟みかあつとや 雪乃乃

上已

雪乃乃 川乃乃 雪乃乃 雪乃乃
 雪乃乃 雪乃乃 雪乃乃 雪乃乃
 雪乃乃 雪乃乃 雪乃乃 雪乃乃
 雪乃乃 雪乃乃 雪乃乃 雪乃乃
 雪乃乃 雪乃乃 雪乃乃 雪乃乃
 雪乃乃 雪乃乃 雪乃乃 雪乃乃
 雪乃乃 雪乃乃 雪乃乃 雪乃乃
 雪乃乃 雪乃乃 雪乃乃 雪乃乃

孤屋 舟被 全 沾使 桃浪 其角 知行 舟被 利半 孤屋 芭蕉

雪乃乃

遊つるよ命赤くむ小あゆみ サカ 有

まきもや 博の果つぬぬの編 芭蕉

出あつて一の葉や二三 子珊

ほろろくともみ枝門のつら 怒沈

そ乃りやけ乃く 櫻や風乃未 猿轡

そあつて 仙華

遊り 子珊

法衣坊を 遊り 孫坡

山集 半あはは孤屋

子珊 み

重なる 孫坡

遊 利牛

夏部之雑句

首夏

陸うと乃 喜はと見 兜名

衣うと十日 舟波

糸をぬく 丸名

花うらや 子珊

舟のあ 利牛

庭 利牛

うの案

卯 芭蕉

う 利牛

遊り 子珊

うらむ花を若毛乃るのむ海に 許六
卯の花を柳の葉をわたりて 考

歌一三九

掉の歌をよもう海にわたりて 柳葉
盤石に花は蓮あるまじき居ふ 赤棠
うらむ花を柳の子散は老を思 芭蕉

郭公

うらむ花を二階にわたりて思ふ 桃成
ほろろきん二の橋乃を思ふ 斥鴳
夕煙と月を思ふせん心なほ 虎堂
挑灯乃を思ふ途をわたりて 枚爪
本よりわたりて思ふ橋をわたりて 芭蕉

うらむ花を思ふや 子親 麦堂
時を思ふ 風が雨を 利半
子親 旅の物忘れぬ 枚爪 此波

麦

柳を思ふ 麦の穂を 荊口
麦の穂を 麦の穂を 千川
麦の穂を 麦の穂を 許六
公孫乃穂を 川を 許六

刈てみ 麦乃白ひ 利半

おあ 麦

麦畑やおあけても 枚爪
おあ 枚爪

浦風やひらくる櫃乃てふれき

岱水

端半

五々之雨や傘ふけし小入取

其用

さしぬおとみをちりつふれぬを

油堂

五月よりあすみあまるあやめ

桃破

久もあくはしも命一程五把

炭窟

みと乃やを首乃胃しう甲る事

仙死

附子の志こぬさ御る捨りね

素封

夏菇

蕪根をみのりそ町のほつと

卧高

枯草子壺泉あつし是れ十あ

斜炭

二之表 鶴を喰ともあつと

每夫 魚町

いけ山の力及てぬあつと小

糠難

すの地やと花とあつとあつと

芭蕉

皆を捨田うれれ使

五月雨

いれれやとけり人あつと丸末橋

事身

五々之雨のなまやと川大和川

桃陣

さみれれよ小術とあつとあつと

破披

五々之雨やあつとあつとあつと

炭窟

この雨を桃陣うちて

五月雨やあつとあつとあつと

岱水

涼

川中の程あつとあつとあつと

芭蕉

月影よりこく交木や雲乃其
うす

涼しさよ 蝶よきこころ 此の枝
夕七

以 柳を志すくこころすこころ
探芝

高風をすくねて涼し 五倍此也
智月

すしきと志すれと柄抄の東下
元峯

すしきと志すれと柄抄の上北
玄来

夕よきと志すれと柄抄の東下
母坡

夕よきと志すれと柄抄の東下
素岑

歌しらす

橋や三交家机乃ありとこころ
杉風

質斗むくや砥草をすしき流る
巨秀

その中やと月貞留のりれを
里木

子乙女やこころとこころとこころ
風若

本名後子

山崎も巴もゆゑ 田植り
汗六

ひらりやるる 津とぬ花の良
智月

たへんやんすまぬぬ生とらぬ
小観

噴のめとさすまをせよす乃雲
乙洲

る乞のぬ糸こはらりなり雲
文卿

雲みーる乃りやんやん雲
仙花

一いまれ蝶のうらうらわさ雲
斐舟

ありうら 蝶のうらうらわさ雲
錢香

猪の牙より帯の糸 赤子雲
有

園責付所ありあつて
怒爪

けしとふハ松ノ木 柵や雲の華 祐甫
一枝をすけふ木竹のわきみ 仙苑
竹乃るや 更々木 苗なきはるのき 成雲

さういふ人 僕も酒をたぐひて
戒めらして酒をいひあつたあき
それさういふあきあき酒のり
名あつたあきをいふあきせられ
たはえ汗をかき

阿久留より名あつたあき 刺半

あつたあきの別業よりあつたあき
てあつたあきあつたあき

あつたあきをいふあきあつたあき 冊破

穂之部 秋のあつたあきあつたあき
内とあつたあきのあつたあき

名内

あつたあきあつたあきあつたあき 樂美
あつたあきあつたあきあつたあき 木末
あつたあきあつたあきあつたあき 荷分
あつたあきあつたあきあつたあき 西堂
あつたあきあつたあきあつたあき 里東
あつたあきあつたあきあつたあき 梨半
あつたあきあつたあきあつたあき 其角

望峯ノ不盡 挽波と

唯月や不二又あつたあきあつたあき 末就

七夕

笹の葉を楳付てはほりしゆく
そ今よりえまゝ五や夏の綱
七夕やふりつらうりたるまは川

其肩
孤居
家名

孟蘭盆

そりきりひまぐらり影やむすり
薄くつきやしく中を遊ぐ是は月
まは乃月ねごとと門とくきり

西堂

本宙

舟波

胡魚

岡岡

胡魚や雲を渡すらん門の垣
お白や日傭せりけの垣

芭蕉
利合

てしとあしお魚をりし柳式

御春

秋虫

手しれをむかへるるきり
悔りし人のときれやふりり
端始りしうききり
こころきりや坐りて追つる梧りよ

倉庫

夕月

大甲

お首

孤居

麻

友麻乃啼と又と久お麻式

車本

人のりとはよりて

麻のつむじや視の羽恒秋

素秋

旅りのしよ

辺に徳や一うらひよま麻の長

土芳

草花

高麗丹乃花やまきり秋の花

桃除

花すきまきりくちりや村にあり

世帯

所是乃花や刈りし船の端

旗籠

芦乃花や白根楊もまきり

夫中

あまのけしき

芦乃花よ笠者くけりや客の裾

去来

山中の草花をみり

草花や白根の足ある分多し

其角

園菊

菊畑おくある芳れりり八

杉風

母菊も多し咲物れ九月の飛

桃降

秋桂也

柳のある木とまきりもの花とまきり

利平

落栗や谷まきりく蟹の甲

祐甫

秋風や花子乃花のありり

木白

箕子すく窓まきりく柿の根

孤屋

まきりしの名を有まきりくまきり

うれは海有まきりくひまきりしはまきり

未詳まきりつま天のまきりく又八つあり

あまのけしきまきりくまきりくまきり

まきりくまきりくまきりくまきり

うれ名目八つまきりくまきりくまきり

天資自然の理まきりくまきりくまきり

花とてさや石甚のよめせしれき竹松
のさしゆのこまあるハ上ノ花は金とては六
すりそちのそれとておけ乃つるまよりせ
ま乃てつれニ階のつまおりのひらけと
よめるあとおやとてみゆるとは虫乃
そつあきまをいハハれりく押りたてハ
うら歌つり歌のすまきとあまうつれ
てひんお梅の思とてつれみまをあり
天倉を茶茶乃とてさりとれおれは様ハ
花とて豆鼓乃比紅茶乃をとみまると
茶茶の頂上とせりうくハとある人
お梅のここのゆきさうみち乃れりゆ

小きまここの一おくれせあんなあは
ゆらみのりしとあをせしとありと六
ゆらめらまきあゆりれきういまの
人くも此世とさうつれをいふを
よのむへりけりまきまもみまをいふと
小市とまのよ

石甚とてゆり根とまや唐止

神歌

歌しつれ

お撲取あしゆや秋乃のりき
あ風呂れ下や茶茶まおのり
礎ゆとくすきは物乃のひらけ
秋のくれいあくりくある牙

岩巻
交革
西堂
為

茸袴や 薙草も 思へぬ 一虫
夕良のけハ 秋一 信考
夕良のけハ 秋一 信考
秋風よ 情や あらき 池の上
信 小枝
庵下乃 片袖 月乃 雲
其角
冬之部

初冬

風や 仲らさむ 山のみ
其角
市中や 杉葉も 落し 一雁
桃隴
冬枯乃 破玉と 乾く 庭
芭蕉
槌木や 嵐 狂まらぬ 心
支那
松の葉乃 きれぬ 小松系
斜嵐

川 苔ま 表れ 池乃 霧 小雀 穴
相安
風 け 蕪子と 小家 穴
砂香
初手 中 猫乃 毛も 三毛 穴
雙舟
風や 膨 志けき 猫乃 面
八桑

少雪の山

本枯れ 根より 付 枝皮 穴
桃隴
笠 月乃 二葉乃 覆 後乃 三葉 穴
游刃

時雨

芋 喰乃 後 へら 一 けり 初 付 穴
荆口
夏 草 霧 霧を わる 青 瓜 一 葉 穴
大甲
も ぬ 糸 と ぬ り け 付 穴 雲 葉 穴
斜嵐

古のうらなひのうらなひ一 許六
 藤のうらなひ
 小のうらなひのうらなひ 世殿
 大根のうらなひ
 藤のうらなひのうらなひ 芭蕉
 藤のうらなひのうらなひ 世殿
 藤のうらなひのうらなひ 西堂
 藤のうらなひのうらなひ
 藤のうらなひのうらなひ 世殿
 藤のうらなひのうらなひ 尔峰
 藤のうらなひのうらなひ 利平

藤のうらなひのうらなひ 世殿
 藤のうらなひのうらなひ 里基
 藤のうらなひのうらなひ
 藤のうらなひのうらなひ
 藤のうらなひのうらなひ

香

藤のうらなひのうらなひ 世殿
 藤のうらなひのうらなひ 利平
 藤のうらなひのうらなひ 置山
 藤のうらなひのうらなひ 信々
 藤のうらなひのうらなひ 権雄
 藤のうらなひのうらなひ

杉のくまはもむねし木の花
朱北鞍や佐世くわくのまは駒
くつもやけさるるくつ消る切
茂美北横断さるるも吹外
浦の舟や曲突よこ平るもは路
江の舟や曲突よこ平るもは路

歌ふ

あしは胸はおし込枯舟う船
まろしや杉糠のうしろ白の端
禿門乃草を袋切らん十数
取や焚え乃益ぬる家村うら
白奥のまろき白ひや杉の箸

聖文
呂九

芭蕉
梓
智月
之

楳の大やわつと方れむさ人
庚申でこくた火難乃わらゆ
許くぬら縁取らんてく神楽
海く陣と数や重ふ枝のる

木中
抄香
其角
全

十

線くまを己ら棚つる大いふ
藤掛せしうとくくは代り船
係つるや元後さけさるる履
山那の又もは知る所定
侍も平氷よすう家らりつる

芭蕉
万平
世破
嵐音
智月

衆

このられも又らり思し口事

杉風

とくまのまのめ 舞のり 年おき

あしをきく 雲一羽と 月のそら 智月

網あつ乃けをく 一年のき 孤屋

くーのぬきまをく くらを儀せぬ 後飯

子乃くれあふくまき 沙波のい 世波

世世うりのあふくれ乃り

うくをくきくをくもよ

凡くく心やうくや年くのり 雲

り年よまへくまをく心ひり 遊笑

誹諧秋之部

秋乃有尾上の杉上離れり 其角

おくれく一羽海わくはる 孤屋

影あふ日備ぢる貝ゆき 全

月め深くはる銀の 其角

裡又く子乃火桶もさきとら 全

つくひは中を丸をくろく 孤屋

下系をく空乃葉取くはる 全

坊主乃言ふは 蕪ハかういお 其角

足裡は子もくは 居るはり 孤屋

息吹くくは 雲乳の針 其角

田乃畔は又苗抱く抱く玉 孤屋

及者のくまを 偏るは乃は 其角

以體乃引半さるると涉
孤念
 形と拙とくくくぬ乃月
其角
 冷繩と冠乃さりぬひぬ
孤念
 厚其下とふ茂ありけり
其角
 貴とく乃構津桂乃表の宮
孤念
 印くの子あり志のをせとて
其角
 いさん泣きき金おつうひ
全
 え乃編乃あきき
孤念
 夏草おしとささるる
其角
 あげととくく小傳らやう
孤念
 手のをとと林乃核も若ちて
其角
 幸とときあきとあ風をまの
孤念

君とねとこりれ汝身乃あき
其角
 輝と臨とみ片あつと
孤念
 幸濟く雀のそりる秋乃れ
其角
 おより冷れ月乃雲はき
孤念
 紙短くくとく来とく西の残
其角
 上寄楽ありと法と抑く樂
孤念
 小栗遠む片若とくく表あり
其角
 々々々々々々々々々々々々々々
孤念
 孤念旅々々々々々々々々々々々
其角
 今とく白赤湯中とく吟吟とく
孤念

其角 孤屋 五十六白

天世年與可

桃露

足下之極其妙之筆字其
 足下之極其妙之筆字其
 入冊子極其妙之筆字其
 嫌之亦古之相乃可之我
 洞盡之亦古之相乃可之我
 足下之極其妙之筆字其
 足下之極其妙之筆字其
 近之亦古之相乃可之我
 足下之極其妙之筆字其
 足下之極其妙之筆字其

降彼
 刺萃
 桃露
 此彼
 刺牛
 桃露
 此彼
 刺牛
 桃露

足下之極其妙之筆字其
 足下之極其妙之筆字其
 此亦古之相乃可之我
 足下之極其妙之筆字其
 足下之極其妙之筆字其
 人之相亦古之相乃可之我
 足下之極其妙之筆字其
 足下之極其妙之筆字其
 足下之極其妙之筆字其
 足下之極其妙之筆字其
 足下之極其妙之筆字其

刺牛
 桃露
 此彼
 刺牛
 桃露
 此彼
 刺牛
 桃露
 此彼
 刺牛
 桃露

杉の本末より内よりくし
 月より若くは乃あつて
 ときより又若くは乃あつて
 よふやうにふりよふとて
 志やうしよふとてあつて
 性の中も肩よりぬき
 ともは 悲別 家よ系 入
 焼物よ 徳食よ 蜀田 箱
 際と 望んとも今も 移て
 勢多 勢多 雪 錯と なる 必 勢多
 先 伸 たる と み ゆる 入 舟
 内 たる 勢多 たる と なる 必 勢多

ちりり風の中ぬき
 母夜

非や内なる 勢多川を 馬具
 振舞の 房の 勢多川を 馬具
 際て 勢多川を 馬具
 中 勢多川を 馬具
 行 勢多川を 馬具
 好 勢多川を 馬具
 別 勢多川を 馬具
 綱 勢多川を 馬具
 早 勢多川を 馬具
 び 勢多川を 馬具

草葉
 母夜
 孤舟
 利牛
 母夜
 草葉
 利牛
 孤屋
 草葉

波知乃雪より新後とせぬ
 母夜
 内きくむ終桃花を吹けりて
 孤を
 疾く舞よとる湯屋の高井茶
 利半
 上りきく此干葉別むとる人の元
 井夜
 るよゆぬ目と門くまきよふ
 芭蕉
 約賣此七つはりきりつれ
 利半
 堀子門よりみ平石と九
 孤を
 叶停れ銀鬼ともを柳月とれ
 母夜
 砂よ晴此うらるまき草
 芭蕉
 新留乃糞とけりつて塵此と
 孤を
 吹くくくくくくくくくくくく
 利半
 門城乃雪のちをあらう
 母夜

平塔乃寺此くまき 芭蕉
 干拍と日向乃ちのくくくくく
 利半
 塩出ん鴨此芭蕉くくくく
 孤を
 又ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
 芭蕉
 くくくくくくくくくくくく
 母夜
 せきまこれの正状乃終まき
 利半
 中よくて傍草合の借まお
 母夜
 壁をくくくくくくくくくく
 芭蕉
 風やくく秋乃踏の尻さり
 利半
 鯉此つ子乃徳とひくく
 孤を
 ちくくくくくくくくくくく
 芭蕉

月思まのりのつれのねらま
まろのうも柔乃三月中母ら
猫炭此ちうとをらよ夫ら

芭蕉 母破 孤屋

利牛 各九句

母破 孤屋 利牛

雪のまおまはみまを尚を
日の出るまの赤さあを

伊耆と一子候よ赤唯く

あつてまきまき大名の供

身はあつて風もふつて月お

東よりまきまきひるまき 畠代

杉風

孤屋

芭蕉

子珊

桃菴

利牛

然火只地まきまき 秋乃水

のねくーらくく機まきまき

二三を 赤名ありぬ門の秋

る乃乃前 抱のさりの干りの

竹の皮雪踏ま踏ままはま

稀ま子のまは雨乃くく

ふちま割れ一人もままの秋

あつてまきまきまきまき

まきまき乃月とわらして旅入

背中人のゆる思とくハゆる

まきまきまきまきまき

川くくまきまきまき

宿老

母破

子珊

估園

石菴

杉風

母破

利合

信之

桃菴

子珊

石菴

鈴屋云々をわくわくをなすは
 考りて入とわかれとわたり
 抄ありふりや抄ありと親より
 云々集矢をいハ抄あり抄あり日
 條系を揃へ信くをくり出
 りきくしりきく業代の親
 言毎ておくバと自勝をまじ
 ともありありと火とともあり
 又けとも佛の合とけと信
 扱をくりしりし賢とが不
 大振此人またわたりをの月
 るとともされと世毎のまじ

杉風
 岱水
 孤屋
 芳良
 桃隴
 倭く
 估圃
 子珊
 利牛
 杉風
 利合
 世波

すあめり山前の常のまひりり
 次代小れをてつとまじりり
 ねあまよりとと信ありとま
 セツのうりふをを我味と見れ
 木の白ありともゆゆと出れ
 男まよりふ遠をろゆり

子珊
 利牛
 多吉
 杉風
 桃隴
 岱水

杉風
 估圃
 子珊
 倭く
 岱水

孤屋
 芭蕉
 利合
 利牛
 石菊
 桃隴
 芳良

撰者芭蕉門人

志太月

野坡

小泉氏

孤屋

池田氏

利牛

阿波野

尾湯寺を檀木堂と云ふは編みか
あらぬといふは此の名ありといふも
お母やふらふ此御旅森せしむら
あつたてのりいふはけすはくま
世のやうらや言ふはま
柳橋の錦と華日て言ふは
しつていふは
しつていふは
て那やのやうら
吾妻のやうら

元禄二年正月

芭蕉桃書

花三十首

よりのや

こけきくととて花は
家よりといふは花の
花のやうら
山里のやうら
何れを花と人乃長
路通
信徳
辰風
友五
尚白
素未

みの乃雲とくハ花も何れ也 母水

い子の乃雲のちり月と母のふるふ 魚洞

トノ下井空をいそぐ花の若 山人

花の山常打く少る枝を 一井

又ありしとありしとありぬ花の能 俊似

見舟のいろはらりる花の能 氣潭

ちと花をほめん人 舟泉

冷汁は菊とさうと花の能 胡及

とつ花は流る傘とす 長如

は舟の花 咲きあり 舟乃雨 枝

おしと花はありて 近りり花の枝 枝歩

瘡瘡の源とくハ花も何れ也 舟

あしと花は風車雲花の能 為是

花はとくは流る 心苗

山あゆの花とタリ 山人

仔りしとや花を 舟

をとりあゆ 舟

福もく友遊ひ 冬松

花を 冬文

首 舟

月花も打くて 舟

あしと花はありて

檀の木はこれよりぬすむべし 全

杜宇二十句

ほろろと知るところを求むる聲を呼ぶ

春の籠れ互反月又つらん 郭云 季吟

月あをまらざる山岸にさか 初らな 素堂

いそぐまき中よりさきり 蜀魄 泊雲

漏船のひそきさしや 作らま 越人

杉のし子のひそきさしや 村多 松下

流や先前舟のつゝ 舟意の郭云 重五

流きまはれさきさきさし 舟乃彦吉 柳風

わろ人のせきまきさきさきさし 舟乃彦吉 龍厚

晴らきほろろのや 作らま 茂枯

地身さほろろのや 村多 一雲

三夢や流乃れや 郭云 日

渡り

舟のまきさしよりさきさきさし 舟乃彦吉 凡景

渡りさや森のさきさきさし 舟乃彦吉 杏圃

舟のまきさしよりさきさきさし 舟乃彦吉 日

舟のまきさしよりさきさきさし 舟乃彦吉 純可

舟のまきさしよりさきさきさし 舟乃彦吉

舟のまきさしよりさきさきさし 舟乃彦吉 智月

舟のまきさしよりさきさきさし 舟乃彦吉 李桃

うらうらと其の心をわくまに
石山

月三十句

あまくと毎のくは月あは
梅吉

それうし月見る月の宿うね
満水

月ひらうをひらうちの今を月か
一喜

無月とともまふし此居あうり
越人

夕と夕もあ照ひく月あは
昌望

屋や木の前はあや月か
市柳

狂うくふ不きて海を月あは
一髪

とこまてもうと城を月乃此津は
毛丸

味まて祝抱く月見う那
任他

一っをやいふと月をうまの月
龜洞

名月乃乃のうらうら
秋人

名月やうらうら二十五六あうら
文鏡

名月やうらうらあうらうらあうら
昌瑠

名月やうらうらあうらうらあうら
傘下

名月やうらうらあうらうらあうら
二水

名月乃乃のうらうら
舞衣

名月乃乃のうらうら
荷子

名月乃乃のうらうら
全

名月乃乃のうらうら
玄春

名月乃乃のうらうら
胡及

名月乃乃のうらうら
約者

名月乃乃のうらうら
約者

雪のふりしつら 櫻のひしつら 月の秋 一盤

十三夜

新婦の夜をよめ 狂える月夜は 杉風

朔日

暮いふ月の舞たり 海の果 若宮

二日

ふる人のたしき 月の夕に 今

三日

何事のもえしを 似んたるの月 芭蕉

四日

夕月あわんを けりて 志すもむ 卜枝

五日

何日をも又さあ 是うや 有は月 柳橋 泉

六日

銀川 又あふは 月を 花 萬葉 隠声

七日

流布 せんを 夢して 夢の 内秋 一盤 彼岸

雪二十句

大はあり

雪の月や 船のしづか 影の色 其角

ゆきゆき 心も 雪も さらさら ぬるきて 芭蕉

竹乃 雪も 影も 水も なく お花も 塵文

かさ ありや 若 花 あり 山 只乃 山 加生

車 瓦 なる ありと あり ありと あり 小春

くらふ事とてなほ歌を度ひたり
 越人
 けつちんくす有ぬつゆは菴小
 草
 ものうけの柳ぬりもきれ一ツ小
 松芳
 くらきまぬは柳は又さうりも限
 二水
 雪はくさるる花はつる花の形
 鬼仙
 ぬの雪はくさるる花はつる花の形
 除風
 ゆされりや川筋斗をくくく
 傘下
 細きやけりおきさるの奇麗に
 芳川
 香乃江の大舟よりハ小舟の如
 冬文
 香乃江の大舟よりハ小舟の如
 桂夕
 香乃江の大舟よりハ小舟の如
 若兮
 りらくや流香の如酒強級

くらふ事とてなほ歌を度ひたり
 越人
 けつちんくす有ぬつゆは菴小
 草
 ものうけの柳ぬりもきれ一ツ小
 松芳
 くらきまぬは柳は又さうりも限
 二水
 雪はくさるる花はつる花の形
 鬼仙
 ぬの雪はくさるる花はつる花の形
 除風
 ゆされりや川筋斗をくくく
 傘下
 細きやけりおきさるの奇麗に
 芳川
 香乃江の大舟よりハ小舟の如
 冬文
 香乃江の大舟よりハ小舟の如
 桂夕
 香乃江の大舟よりハ小舟の如
 若兮

冨旦

二月おまぬくハセーふ花の事
 芭蕉
 あれ人の子からもゆり
 古梵
 わらぬやん千年乃つる縄
 風鈴
 松より伊勢の家賞人な流
 其角
 うぬる香連歌はあはれり香
 文麟
 月香のあはれもあはれり門の松
 去来
 かこりあふさるる年つる栢小
 一日
 えおやけりあはれり年つる栢小

一日
 松小

久月ハ内ナ樹ノ...
一葉

齒圓ノ梅の花ノ白ハ...
大花

妙ノ社老キ...
辰格

何ノ浦ヤ...
色用

去年の果...
昌碧

小梅子...
久廣

トノ男...
舟泉

山ハ...
日

松...
日

引馬...
日

連...
日

白...
日

と...
日

さ...
日

遠...
日

佛...
日

の...
日

ら...
日

心...
日

々...
日

あ...
日

...

...

一葉

辰格

色用

昌碧

久廣

舟泉

日

日

日

日

一井

胡及

長也

前陣

日

満水

と欠

朴什

冬支

金下

冬枝

梅丸

大服ハ去年の... 白ハ...

防川 昌流

傘ハ齒染ウ...

又ハ

神子...

梅古

...

世水

...

全

...

裁人

...

全

...

...

...

...

...

...

...

...

秋妻

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

梅折くあそを又思ひ冊中か
一髪
星もわつさむ矢くすへにを折りき
冬松
みのむしとまわれはる梅のさうりか
蓬草

綱代民謡の鳥を連く

春毎の末よ多とすを春梅の花
長長 草花
うらみすの思をこぼる山鳥の羽
長長 若風
雪は心や解ひらふ片もやも
長長 春
あつたのや雪もあつたそこの瓶
長長 一羽
雪よりあつたききもあつた
長長 一羽
うらみすは声よ取とつ次巾か
日 巾
雪よりあつたききもあつた
日 夢
雪よりあつたききもあつた
日 古

ゆきをすはたすとすの雪を那
飛水
ゆきをすはたすとすの雪を那
雪文
ゆきの裏とすはたすとすの雪
冬文
ゆきをすはたすとすの雪
草花
ゆきをすはたすとすの雪
春下
ゆきをすはたすとすの雪
雪文
ゆきをすはたすとすの雪
雪文

葉を
さし一本

つきをすはたすとすの雪を那
春下

接木

つきをすはたすとすの雪を那
春下

枝

曉の鳥籠よあはるはくたへる 茶子

曰

菖原く睡鳥のつらぬつくは 卜枝

車馬

とる面をいせまはるこころを 端水

曰

去のる身をもとへりてこと 氣導

必尾齋

くやゆきの尻つちきるる白尾が 世々

雄犬井玉まきぬけりてまこつれ 夢生

主印くしそる草すんくはぬをが 兼助

すくくし教子橋をりはくく 泉永

すくくくつむやつまやふら 其角

すくくくと事や字のきりり土子 兼登

去橋やふらふらとくくくくく 権車

川きやふらふらのくくつはくく 冬文

はくくくし路巾にふらふら柳が 喜江

菖原はくく池の中橋をむすれと 兼登

池の形ふく似る名書おふ柳は 素堂

風の吹方を後を柳う舟 世水

何より七形くくはり柳が 越人

くく柳くくをふらふらりく 一葉

尺よりりくやぬをぬる柳が 小春

すくくく柳ハ風よとてつらふ 一葉

昌治
 杏雨
 此梅
 杏雨
 松芳
 校遊
 夜子
 日
 素秋
 露毒
 生林

仲春

不梅
 長虹
 傘下
 信州
 玄来
 冒頭
 歌人
 笑州
 徐風
 一梅
 冬松
 一髮

野水
除風
一雪
塩車
山陽
宗隘
落梧
越入
去来
炭枯
雲下
一井
柳風

椽相の葉にさしてさる椽椽の
中やり乃中をおうぬるこくか
かれ芝やあつてりた椽

書

何の舞もつらぬよなよ乃董冬
ぬゆくと馬中をさるぬ董艸
やうくの土と谷粒を董うぬ
草刈と董選ゆり董うぬ
り憶乃ゆくと張るぬあささか
麦畑乃人ふるふる此塘也
なけ山也織乃月のすくすく

忠知
荷子
野水
舟泉
臨舟
嬉遊
杜国
夜
式之

ほろくくと山吹らるる 淵のまゝ 芭蕉

松明をさす吹らるる 夜のみま 世五

山吹としてさすきれぬあやみ 下枝 徳書

一そらと山吹のまゝ 心ゆく外 日 蓬雨

とらひはあはく山吹のまゝいふ心 去来

あはくさすゆくまゝあはくぬ燕外 俊似

去年乃鳥のまゝいふまゝ燕外 長之

いささかあはくぬまゝいふ燕外 長虹

葵の葉を眼はくまゝいふ 菖蒲

芙蓉のまゝあはくまゝいふつらま 且菓

友城とあはくまゝいふやま 蕉笠

あはく清き新しう浦のまゝ 越人

杉のまゝも月一 竹や柳のま 傘下

人あはくまゝと隣とのまゝいふれ 友室

山中ゆふさかあはくぬ 荷台

柳あはくまゝあはくまゝいふ 兼正

無さくまゝあはくまゝいふ 垂筒

水さきりや鐘実あはくまゝいふ 下枝

水さきりや油あはくまゝいふ 舟水

りまのあはくまゝいふ 日

初夏

ころもわかや白きを拍まふつら 路通

更な徳もわくまゝいふ 傘

ころもくへ日もさししてんくとんか 萩 尾弾

首柏老人のりちなまのりやしやうふ

查せよのこふひけふ文難とこれき

とて書の紙紙入らりらとまをさされ

うく烟もりそめ比文鏡よすつは

昔不焼香もあふくく一衣更 袴分

山路やう

たつ草ももくく一ひ葉のつた

いちごつとむれくこあひんま原と

橋北東乃いこまるとるるるる葉ハ

切ふふりけのふふとらんれと橋ハ

りけのやうくそのあしのワの葉ハ 無加

りくくくとくうふとちる橋ハ 竹洞

いけの葉下ゆくふり沢外木 修寺

上テおふつのは程とてま一穂 夏火

枯まをままとるてんる世也ハ 女葉

まうりて葉のまをりけりり 生林

ひきくくふまくし里乃葉ハ 池可

まくく葉ふふくくや疎の葉ハ 宿葉

まふふくくあふまきけくの一まハ 湯指

くく敷く敷く葉葉葉とるるくハ 菅

大粒系てふまこくくく葉子の花 葉

大粒系てふまこくくく葉子の花 葉

菴乃赤もえりくありぬすこ

源川乃三層や

さゆさゆりぬたねえんおるこ

仲夏

青のるを箒まらるる螢式

刈草乃るる屋ふ光ふゆる式

窓くきき障子でのける螢八

園兒よるるき人呼量る種

石細く遊るぬぬ波の量るぬ

あきの水を下るる水雲うふ

ささるれ種まき物る中ふふ

水沼く流るる種乃けりる式

くさくさ葉まきまきうりけりる

くさくさのそくわあの新瑞ハ

故乃むれく梅の一本の星まら

くさりやふふ種まきまきありあり

るれら代傘乃るるんぬ故ハ

故乃癒まき種乃るるまありあり

層のむをうけりる燈乃の量るぬ

ゆりく層のまきまきむ星若くか

星伸くく娘百合種乃るる星終

竹乃るふふけりるさけくさんりり

箒此竹乃るるさけくさの竹

言次

嵐堂

野水

標井

九補

一發

不交

風笛

石江

倉詰

一校

語書

秋芳

小春

春雨

二水

一災

胡及

見竹

此橋

長虹

去来

國にきこえてくるもさ水龍は

あつちのふ柳まきまきるけりさ 大津 舟あ

このはら小粒ふあつぬむ月る 尚白

ふつちのさ傘ふまきまきとるちふ 龜洞

は草ゆく

はらうらうらしきとふ花龍水 貞室

はらうらうら

はらうらうらやうらあまき花水 芭蕉

おる

花のつらうら無とわねく懐し 若今

は

はらうらうら熱もほく人持詞舟 越人

先少の乃教もやうぬ花舟水 舟 淳児

曲は小舟乃又えぬうらぬ水 栴鉢

鴨乃の葉乃のええうらわふつち水 踏通

ねまの編をうらうらと又舟水 小枝

ね乃根をうらうら舟舟乃種水 純可

蒲乃の葉や花まきまきとるちふ 全

押まの葉花まきまきとるちふ 越人

はらうらやうらうらとるちふ 若菜

夏は水やうらうらとるちふ 且菜

菴の葉ゆく

すひつちとくちふとるちふ乃岸儀 其用

夕うらや花をうらうら此飄く 芭蕉

中へ入るの志ありは人の志ありぬ
夕魚ハ故の鳴わしのうらさ
山路まわく夕魚なるなる
名ハ原らほ夕魚は似る

暮夏

楠も動くやうし 輝乃多
市ノ原 梅くらふらむあり
夕魚ハテ 傘のうら 垣植ハ
夕魚ハテ 板もやうぬ
夕魚ハテ 白雨あり入月
夕魚ハテ 原ハやうぬ
夕魚ハテ 代原もやうぬ

池水
借
柳
長

昌

池水

傘

素

杉ハリハ乃人ハ達クワタス
花ハ乃石ヲヤ艸乃下
原ハヤ楼乃下
挑灯乃下
吹く
蓮ハ心見
河骨ハ
す
連

如風
俊似

ト枝

未

秀正

晨凡

古梵
芙水
長
俊似
文圃

引きく馬よのすけりる志くもハ 濠月

かくもくを流るる志くもハ 尚白

虫をぬくは清き志くもハ 一髪

虫や幕をぬくは清き志くもハ 枝

林の志くもハはれりる志くもハ 葉

流るる後又付くは志くもハ 越人

綿乃死せしめくは志くもハ 素堂

初秋

ちりちり麻の志くもハ秋の風 越人

梧の志くもハ志くもハ人林の風 圓解

雲高雲低の志くもハ

一葉散まらるは志くもハ 仙化

うさひのりちや秋の志くもハ 杏雨

朝霞を早の志くもハ 芭蕉

朝霞を早の志くもハ 文輝

あさうを乃白さハ志くもハ 為

あさうを乃白さハ志くもハ

あさうを乃白さハ志くもハ

あさうを乃白さハ志くもハ

あさうを乃白さハ志くもハ

あさうを乃白さハ志くもハ

あさうを乃白さハ志くもハ

あさうを乃白さハ志くもハ

昌長 去来 嵐 胡及 臨 月

畦乃不亦物よもゆりつあえりふ
 まつひらへ通る路よりゆりりり
 まりくを體甚滑くゆりりり
 あの雲を縮つを待たぬりり
 西
 舟泉
 芭蕉
 其角
 不知
 伏見
 任口
 胡及

素堂法師乃とてまよつて

素堂
 俊似
 仲秋
 芭蕉
 小春
 益音
 牽下
 上枝
 一髮
 一泉
 其角

あしぬく〜物のみて〜るの〜

葉の平よ〜あ〜〜〜枝

と〜と〜あ〜地〜〜あ〜

り〜ら〜と〜と〜秋乃〜

り〜の〜草〜

取も〜を〜あ〜秋と〜り〜り

妻あ〜あ〜あ〜

とす乃〜の〜ぬ〜蓮の〜

一本の〜の〜鱧〜

杉の〜あ〜あ〜ら〜秋乃〜

と〜〜〜〜

あ〜の〜ぬ〜

東嶺

林芥

戴水

宗和

小枝

越人

防川

舟泉

胡及

曉龍

因乃〜

と〜と〜と〜

より〜

手〜あ〜〜

り〜と〜〜

暮秋

あ〜あ〜あ〜

あ〜〜の〜ち〜

山路の〜き〜

一り〜他〜

あ〜ら〜室〜

と〜と〜着〜

芭蕉

一笑

巴夫

冒暑

越人

暁龍

かきつけのききとてんやの氣 其角

筆おつゆ洲の人で必賢帽子 日

くしよあつてさあゆつてつりゆり 二水

あまのりくききとてんやの氣 濃洲 伊格 千閑

淋しきとてんやの氣 淋 芦又

あまのりくききとてんやの氣 加生

あまのりくききとてんやの氣 路通

初冬

あまのりくききとてんやの氣 湖春

冬

あまのりくききとてんやの氣 尚白 湍水

万句集のりよ

あまのりくききとてんやの氣 荷子

人

あまのりくききとてんやの氣 落梧

あまのりくききとてんやの氣 秋玉

あまのりくききとてんやの氣 傘下

あまのりくききとてんやの氣 為子

あまのりくききとてんやの氣 一髪

あまのりくききとてんやの氣 日

あまのりくききとてんやの氣 日

あまのりくききとてんやの氣 季暮

あまのりくききとてんやの氣 野水

善若虫乃のつらふるや 障花 昌若

麦よりとく青紙藤より一菴水 全

乃くくや 善若くは乃をく 一井

獲りのとくくくくくくくくくくくくくくく 落梧

石白乃破れくくくくくくくくくくくくくく 胡及

まくくくくくくくくくくくくくくくくくくく 文鱗

あくくくくくくくくくくくくくくくくくくく 卜枝

多粘よ風の体くくくくくくくくくくくくくく 四空

蓮池のくくくくくくくくくくくくくくくくくく 一髪

宿を宿くくくくくくくくくくくくくくくくくく 松芳

このくくくくくくくくくくくくくくくくくくく 杏雨

善若のくくくくくくくくくくくくくくくくくく 蕉堂

を月

燭を吹くくくくくくくくくくくくくくくくくく 冊水

あき漬の大根くくくくくくくくくくくくくく 俊似

仲冬

朽らくくくくくくくくくくくくくくくくくく 佳西

去くくくくくくくくくくくくくくくくくくく 務吉

橙よするくくくくくくくくくくくくくくくくく 空流

袋のくくくくくくくくくくくくくくくくくくく 林芥

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくく 李雨

空のくくくくくくくくくくくくくくくくくくく 空之

水相乃葉のくくくくくくくくくくくくくくくく 杜園

清き池氷のくくくくくくくくくくくくくくくく 務吉 俊似

つさつりてまの葉がきりり落氷 陣風
歩けりし何そや一多に氷後氷 萩舟

兼歌 香舟

時より香舟葉とらるる落氷 氣潭
ぬつくりと香舟は雪とらるるにさか 荷々
氷とて多くと香舟は雪とらるるにさか 長缸
香舟より香舟川出た船とら 一井
つ々しくつくりと香舟は雪とらるるにさか 龜洞
香舟は雪とらるるにさか 會田
香舟とらるるにさか 忠知
香舟とらるるにさか 龜洞
香舟とらるるにさか 村俊

井とらるるにさか六月をく

兼歌 男ハ冬裸あり

汗出ると冬裸あり 冬松
海風揚乃と雪埋りて氷室外 利重
炭竈乃穴ぬきとやと落けり 龜洞
藤籠をばとらるるにさか 塙車
火とらるるにさか 一矢
つくりと底記せばとらるるにさか 無洞
香舟とらるるにさか 芭蕉
歳暮
踊つとや門やれとらるるにさか 李下
香舟とらるるにさか 尚白

りら 花の後とすりてりら 煙
もも 迎く 構つてゆる 葉知れ
煤もも 火 梅よ けりる 瓢の 舟
一盤

あまの 月とてりる人乃 ちり
とて 秤乃 実也 ちりちり ちり
の 音とてりる ちりちり ちり

とー乃 ちり 秤の 実とてりる
ちり

門 表とてりる ちり 蛤一 ちり
内智

田 他とてりる ちり ちり ちり
龜附

雜

年中行支内十二句

供屠蘇白散

いとけあやととあえりりる人
ちり

まま白糸

ちりちりちりちりちりちりちり
ちり

石清乃 臨時糸

ちりちりちりちりちりちりちり
ちり

灌佛

ちりちりちりちりちりちりちり
ちり

端午

ちりちりちりちりちりちりちり
ちり

施米

ちりちりちりちりちりちりちり
ちり

ちり

乞巧奠

わの葉ふるま七夕あまのこゝろ

約迎

瓜髻も旅乃すうとやとむじく

撰虫

夏の葉や足乃あれさきうら

十月更衣

五しきれ衣之しう魚の花

五節

舞姫の装ふ玉指を折ふり

追儺

はるれとや服はるる鬼の面

詩題十六句

野水

今日不知誰計舎春風春水一時来

水や一海の海はあまの風

白片落林浮湘水

水を乃とくは付くは林白

春の来を伴閑遊少

花實よみあまののゆくは隣う形

花下忘帰因は景

藤入るくまのけいませよ花の下

留春春不留春婦人寂寞

以来もくくくく乃母もれ

巖風吹袂衣不き復不熱

綿脱とねく世すよりの
池晚蓮首附

蓮乃くまもりあふらふ

暑月貧家何処有客來唯清北客風

涼然とて切ぬをより北乃す

大底四時心總苦就中斷腸是秋天

言の旅とまてくハあ秋のま

夜半風急後秋氣颯然

秋乃雨そり瓜うへふ

空之瀟灑袖長夜耿々星何欲曙天

孤とまてりひさうあてあせき

殘影燈兩牆料是月穿牖

初り藤やほら身まの月

万物秋葉能壞色

空菊やまふ影そり心と秋乃ま

十月に青天氣聲憐々景似春花

こりもまてり息つく小まハ

寂寞深村夜殘雁雪中岡

行くとまてりこぬひやまのうま

白政教後佛名經

佛名乃れは腰懐く白髪くね

後園乃擲ひのこり終り

まてりまてり

鋸鋸

目立
かたへ乃夕日ふりまてり

五泉

付本突 ありて 園み 籠て 之 人乃 家
釣靴 ぬき ありて さや 海の ほと 秋の 里
糊賣 あさく ありて まさく 折れ びつて せり
馬糞 糞 乙の ありて 松葉 糞 ありて せり

李夫人

越人

魂在何許香煙引到焚處

かりり乃抱つてわづらひ

楊半妃

雲鬢半偏新睡覺花冠不整下堂来

くさく風よ せりゆき せり 森白の 扉

昭陽人

小頭鞋履空衣尚書代墨眉々細長

外人不見也 應笑

上の 救奇や びり の 雲の ぼろん

西施

宮中拾得 塚眉 弁不 献 昔は 是 愛君

花 弁 せり せり せり 牡丹の 扉

玉照君

玉貌風沙勝畫圖

と 此 ありて まさく せり ぬき 乃 柳の 水

一日の ありて せり せり せり

酒者

弁 痛やの 故や 山 保 能 焼 ちよ せり

辰 社 ありて せり 書の ありて 日 ありて

己 溝 釈の 眠 ありて せり 扇の 扉

午 水河のよき藤千上を踏ひしも
未 櫻乃喜ふ武家乃夕言ふより
申 中月るや鶴しあるもいれり

西よあそび生とあつるを組隊

山獸 麻雀乃上子をつらぬあそびさま 樹水

母者 鴨突乃以新長き日あし式 兎行

里虫 枝あそび虫よりより蜀漆うね 言帖

海魚 けりしるく鯛川り盆乃月 全

川魚 秋乃會 鵜川くつ火ぬり式 言帖

牛馬四足是謂天落馬首穿牛尾

是謂人

一ちと梅くく 桃乃結木うね 越人

藏舟於壑 截山於澤 謂之固我而

夜半有々力者負之而走

りくちくち原走乃希くうさく心

後聖棄知大盜乃止

七夕を扱くすりしもあきむら

鏡者天

散くく 泣あきりのハ花火うね 桂夕

紙者妻

勢流のまよやうるさぬう那 市山

藤房

けくきん 鳴る心付とまうなり

原虫

一井

うろくく人々みくも新く形 虫

一休

うろく乃乃やちたりや月の雲

湍水

法然

鳴る乃乃ほくろひもあまらうけ

湍水

山岩

朽く山々 衰ふ減る岩乃角

湍水

海岩

苔くさくさ 浪中を世もあつりり

全

名所

八音子も真をいふふ就田界

杜園

真乃貴や式ア大江山

長子

ゆき清乃松と花より勝り

芭蕉

平泉一把くさくさ花るる 乃波子式

湍水

浪は海はくさくさあゆみお花堂

長子

深瀬橋彫空

高砂の鬼嶽とむきし海生火

言帖

園子つらくさくさ花るる 乃波子式

言帖

安波園園くさくさ乃波子式

鳴る乃乃ほくろひもあまらうけ

草舟のゆく布子雲を行く 文之

杜園

まきうつや月夜もあまらうけ

芭蕉

みくろ雨くさくさ乃波子式

芭蕉

湖乃乃あまらうけ乃波子式

芭蕉

斗も多しき物わらの六月面 一發

角田川あり

つこのはれ溪谷乃新食を教る

皇室

みづのさけいふ秋を具乃吉

破笠

いさよひもささしき乃部入

芭蕉

夕月や杖よあやう角田川

越人

九月十三夜

唐土は富士ありてり乃有る

素堂

略と突乃るやらるる乃田外

胡及

略と突と世直付乃あがのむまこ

淵支

袋と我母やいふあも。付し白

舟泉

湖とを根うらるる村これ

尚白

かゝ瀧やとありありとく砂明ぬ

伊勢 以友

むきし舟くたりくさる乃目あり

洗悪

先つしと生体氣を短やふの奥

俊似

宮乃富士とあやゆくのつらり

一突

そし舟も峰大古乃夕の非

舟水

早流乃やと見えとや鳴あを

芭蕉

水乃乃見や石破のち家の様拂

如行

旅

雲雀より上るやとらふ峠と那

芭蕉

大和玉平尾村ま

花乃陰海に似る旅ぬら

全

様候里と眠るく通をりり 又机

日乃入やふよとくち桃の空 一髪

の〜〜や凄乃星のけささう家 荷子

出〜何膝〜う〜まはひぬをえ 芭蕉

あゝ人乃饑あや

わ〜〜きん涙ねとて笑りり 除風

寐の〜ぬふ言焼者も明やまき 老松

改と〜らん〜らん〜旅森は 冒碧

あ〜〜も桂目と出れり乃家 松芳

夕まよとの大名う一志行架 傘下

芭蕉ま〜〜〜〜〜別〜〜 湯若

う〜〜と食るま〜の垣根式 暖繼

人乃のわ〜と〜

され〜とあれ〜ま〜れまの石 芭蕉

回里の人よまは〜

こわ〜〜此〜ま〜ま〜の山ひみ 杜国

鎌倉建長寺よま〜

あゝあか〜身とほあねあ〜と〜 裁人

あゝ人のり〜う〜ん〜と〜ま〜

あ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜 荷子

古に乃〜ひ〜ひ〜

あ〜〜ち〜乃〜暖甫や冷〜〜〜の声 嵐禅

櫓乃て子歌子とては鏡ねて
去来

月や遠く耳やちかちか
西水

ぬるさよ子脈乃結は後年の言
芭蕉

さあくのこころとけりさよの言
除風

老まきとては賢生とては

仍年や親よきとては
裁人

之息

まきの母よ心ある人乃き魚
一首妻

きぬく世事れとては
除風

故屋出く寐くふとては
長ね

むしり乃月よ立梅や
文圃

虫にけ少物とては
之文

さけりては
心棘

とては粉黛毒歌

そ有園乃梅妻消とては
長虫

一笑とて人侍とては
尚白

さけりては

つまねりては
荷夢

去るあつとては
小春

妻乃名のおととては
裁人

松の中 舟多旅乃とては
俊似

抽弓ひ火燧を鳴とては
舟泉

うさねとては
嵐蓑

山柳よりのとては
松芳

まゝぬくを敷つてしる房のり
朽そら〜やきあ〜の比神き
昌

無常

末期

あゝ花と東を河原流石とく
守武

世に世に速

あゝ散つていふあきき〜の昌
年

末期

あゝや空〜の明のほ〜き
界
元頃

松坂の浮瓢〜のあきき

〜のあきき

橋のり〜のあきき〜り
持

あゝ〜のあきき

あゝ〜のあきき〜
京
去来

あゝ〜のあきき〜

世〜のあきき〜

あゝ〜のあきき〜
丹水

辞世

あゝ〜のあきき〜
二

あゝ〜のあきき〜

あゝ〜のあきき〜
後格

一原

あゝ〜のあきき〜
約

妻乃遊あそぶ

~~~~~  
あそぶ下妻乃遊あそぶの里人さとびとをねむるねむる 自収みづかひ

~~~~~  
あそぶ下妻乃遊あそぶの里人さとびとをねむるねむる

~~~~~  
あそぶ下妻乃遊あそぶの里人さとびとをねむるねむる 六末むすし

~~~~~  
あそぶ下妻乃遊あそぶの里人さとびとをねむるねむる

~~~~~  
あそぶ下妻乃遊あそぶの里人さとびとをねむるねむる 其角そのかく

~~~~~  
あそぶ下妻乃遊あそぶの里人さとびとをねむるねむる

~~~~~  
あそぶ下妻乃遊あそぶの里人さとびとをねむるねむる 尚白しょうはく

~~~~~  
あそぶ下妻乃遊あそぶの里人さとびとをねむるねむる

~~~~~  
あそぶ下妻乃遊あそぶの里人さとびとをねむるねむる 芭蕉ばせう

~~~~~  
あそぶ下妻乃遊あそぶの里人さとびとをねむるねむる

~~~~~  
あそぶ下妻乃遊あそぶの里人さとびとをねむるねむる 蕉持せうぢ

~~~~~  
あそぶ下妻乃遊あそぶの里人さとびとをねむるねむる 小春こはる

~~~~~  
あそぶ下妻乃遊あそぶの里人さとびとをねむるねむる

~~~~~  
あそぶ下妻乃遊あそぶの里人さとびとをねむるねむる

~~~~~  
あそぶ下妻乃遊あそぶの里人さとびとをねむるねむる 芭蕉ばせう

~~~~~  
あそぶ下妻乃遊あそぶの里人さとびとをねむるねむる 蕉持せうぢ

~~~~~  
あそぶ下妻乃遊あそぶの里人さとびとをねむるねむる

~~~~~  
あそぶ下妻乃遊あそぶの里人さとびとをねむるねむる 若わかし

~~~~~  
あそぶ下妻乃遊あそぶの里人さとびとをねむるねむる

~~~~~  
あそぶ下妻乃遊あそぶの里人さとびとをねむるねむる 胡亥こがい

~~~~~  
あそぶ下妻乃遊あそぶの里人さとびとをねむるねむる 若わかし

~~~~~  
あそぶ下妻乃遊あそぶの里人さとびとをねむるねむる 桂園けいゑん

~~~~~  
あそぶ下妻乃遊あそぶの里人さとびとをねむるねむる 若わかし

預言の傳ふも傳へん 増さるる

其前

貞享つちの辰乃案派生一日

東照宮乃別當傳正乃以房に意を

去所にて左様と申法幸八續の傳

とてそきさのめれと申はあは

序品乃くくく

教ふつた乃好のくむくく

幾人

女房の聴は平とてえくは兼

きれねく鳴きさ何く就女成併の

西きまうと志のひあくは鼻む舌の

けくくくくくくくくくくく

日

親多れ尾上乃様 鳴くくく

俊似

ちきやけくくくくくくく

一片

ハも曲く

海士乃家聖よむく打派生

伊藤

千箇

鳴くくくくくくくくくく

一井

夏一やも後く乃江湖

葉葉

ちきやけく

儀佛の目又生れあはし麻乃

芭蕉

備仏乃そは清くくくく

尚白

ちきやけく

腰乃あしきれあはし乃山

一舌

あしあはく菴一日乃清水

一笑

十如日

行のりて子流れく通すしと云 荷字

即身即佛

夏陰乃曇持ちて之乃佛外 愚益

厚くくひや信の徳なる夏衣 氣味

ねくくや門のてあま施賊鬼棚 荷字

おくけ乃火をさるむのさくま 撥凡

石籠は施縁是乃棚のさき 文里

魂系ふか下架海とく向り 秘内

た中へつり道とやあく舟並み 卜枝

持付めりうらなとてん松の信 納老

平等施一切

持付まゝく人とも思ひり 俊似

稻妻の大佛たうむ舟中 荷字

垣越は引導叔くを成火 卜枝

あゝ人何の景物あつと水結

と縁は不食不圖を感して

あゝも厚さうとす

厚くくぬら佛うあゝぬを 荷字

あゝも乃血なり

舞の寺乃鼓わりうて 其角

さゝくく坊をれく城内の舟 一井

所乃さふ糸とさうる法師小 卜枝

人のめくあゝとてら如印

乃のまきとまくれとせ

石の多し又た石のりり一付る 荒涼

縁念の安固滞さふく

たしくさの涙や直ま 悲しくん 哉人

古寺ののろ

曙や 伽藍く 乃多又雲 蒸

日

雲彩やうらるる 二五乃片 腕 倭似

つくりしあまこころれ ちりあふ 一井

新森する人のさうや 津とまき 女洞

千観るるもかせり 舟のくれ 具名

葉ま品七句

かゝる者於火

たの白まむめの雲より 胡及

如得者得云

吾乃見や 俗様捨てあまの家

如商人得圭

双古乃のひてよむらむつとて

如子得母

竹くくくくくくくくくくくく

如後得船

月乃に津乃 核本きとまりり

如病得醫

かくくくくくくくくくくくく

如暗得燈

秋乃夜やねのいよゝき不記

神祇

古多やや志るるる獅子改

二月はあつた酒

記ささきやや乃月の梅

志んくくと梅らりるる危火

嘗もああひてこそ神乃梅

上下乃さうぬやに林の梅

燈のやさうありたり梅乃中

何しやうねんそそ梅の記

是くおくあつ海そさる林の梅

月代もさるるや梅乃あ

酒

花

同

魚

冒

酒

我人

泉

雨

ま

金

池

栗

葉

言

魚

未

荷

尚

松

医

門あそ梅乃瑞龍ねまより  
繪るるる人の後乃さあそ外  
着る身もさあそさあそ社外  
ま乃後川流るるさあそ外  
此も後乃木紫乃中の性う形  
けくきん井糸の中を通り  
まあ乃灯とワる火申る  
破扇てなまうは後う形  
川系速瘡まうは後う形  
こわくや里乃子歌く神輿終  
此乃乃まは後うはわすれ  
あそはや孫宜乃さける油筒



きくきくぬふしぬの神々  
流乃方とを徳とを以て取の神  
流麻川 取乃乃旅を神  
かつきこれ神とすきき  
格統や取統うきく

祝

肩付とくきふあうぬ  
為字の字乃其

我事も竹を修り又中る  
君り代やえくくく  
まき苦も仍りくく

利重

世水

昌崇

村俊

卜枝

之文

之志

我人

余木

いさくくく乃上子杖つう

無印

子代乃秋にむ少と

日

志くくくく人

先祝へ梅とん乃

芭蕉



曠野集負弁

流るる水もなほとくさくさせしむる水の中  
よあつて船のりきまごころ舟下あ東  
四岬の林森うらましく花乃にさつここれ  
さつここれとめて佐川田表のめう一の山  
あまふくしとくさくさせしむる水の中  
妻喰く居る人わかれ  
此の尾湯乃母水子乃伴と芭蕉  
多母の侍一とせしむる水の中  
比田神入居る人わかれ  
感とせしむる水の中  
に虎乃物候せしむる水の中

〇一 壺

わたりて特色をなす一とせしむる水の中  
わたりて特色をなす一とせしむる水の中  
わたりて特色をなす一とせしむる水の中  
も實乃室老杜のくさくさせしむる水の中  
程原の白を去る水の中

素堂

妻をとりしれまふまわぬ居る人

この文人乃る水の中

一とせしむる水の中

母の

棧の路も志しむる水の中

も乃志しむる水の中

門の石月伝園乃やせしむる水の中

母の  
荷分  
越人  
水

風乃月利と秋秋乃雲  
武士の意をいひし中も不慮に  
志よりまつて謝乃鳴るも  
空より経るる雲とま乃  
はくし海へおてるる雨  
まのまに松鳴垂るる乃乃瑞  
千白くくあむ山乃乃  
陸さあゝ一を橋も咲残り  
あつゝもなきり月東の  
露乃身ハ涙のやうな  
秋涙ををなく 望人の妻  
鳴るす 西も東も鐘の音

水人兮 水人兮 水人兮 水人兮 水人兮

まのまのりる利根の川舟  
舟乃舟のてうしとてうき雲  
あつゝもなきり月東の  
狐つゝもや人乃乃るる舞  
拍本乃肝の氣のけ乃つゝと  
くやゝゝゝのゝあまゝつゝ  
月乃氣をり合より 辻未撲  
秋よあゝりり 里乃 酒桶  
あゝゝゝあゝあゝあゝあゝ  
あゝゝゝあゝあゝあゝあゝ  
あゝゝゝあゝあゝあゝあゝ

水人兮 水人兮 水人兮 水人兮 水人兮

かゝこゝの 諫は涙をけり

火著のそひてよのあつきし  
くくそりのつせし人のまうら  
あせきとくはく地のかつと  
ささりまねもやう定らん  
けくまぬるまか枯り案  
まるとまをふ月とわさつ  
大根ささりてんつそり

無附

遠海や浪よ志更良樹し  
けりれあうら酒乃あうら里  
のくりや子さ海は高を解  
百是乃懼る菜とさり案

冊水

昌案

為兮

夕舟乃雲の白さをくら  
ねと乃葉を裾より引かせ  
萩のあやとともも去らぬ  
一語さして是も古綿  
まのまよままよ宜祿う  
あやとねはく杉あやま  
いつくまもてあやふ  
出流ままのまあや  
海一やと起りて川乃端  
ささりてやうはる舟  
秋風よ女車乃盤ねと  
種をまきりて流の法輪

糸泉

約書

舟

飛羽

高兮

昌案

流書

舟泉

冊水

荷兮

無附

約書

時〜ふりあひて〜花の葉  
 八重山吹ハ〜何せん  
 日向のてや〜ハ何せん  
 公や〜ハ何せん  
 向して実や〜ハ何せん  
 垢離くく人乃〜ハ何せん  
 配所や〜ハ何せん  
 寄〜ハ何せん  
 門〜ハ何せん  
 行のひ〜ハ何せん

昌碧  
 母水  
 荷子  
 龜洞  
 龜石

壺も〜ハ何せん  
 や〜ハ何せん  
 フ〜ハ何せん  
 友の〜ハ何せん  
 桶乃〜ハ何せん  
 人〜ハ何せん  
 乃〜ハ何せん

昌碧  
 母水  
 荷子  
 龜洞  
 龜石

冬文  
 本房  
 丹泉



曉あけく提燈下よむ

荷守

けしきの花とらまをひらりまらうまら

松芳

味咄しむるよとの漬さかう

松芳

芙蓉乃乃門まきけり新分

松芳

次赤くしよあてうまふり

松芳

よの朝赤貝をまきけりあうく鬼

松芳

顔ころよめくくる心忠旅し

松芳

きさうきさや瀑布をまきけりあて

松芳

そく面かまき山は乃家

松芳

雨乃まきけりあてり戸乃

松芳

101 六

引すてし車ハ路邊乃かき

水

あうまうねくも人のくわひ

水

月の秋旅の志をまきつ

水

一為あまひり

水

初あ

水

菜畑

水

お肥をく

水

下新

水

通路のつ

水

六修

水

代

水

浅一

水

鯉一節



月乃於紫雲峰之山  
花咲くらしとんすりふあ  
天仙夢よ冷食あはしよの言  
うまうのうけよ首経乃中  
乃人どあつて長ねらふを  
夕世よりきほつてやる  
約乃やと暇月の信流り早愛  
秋乃あらしし首経極流  
免ていともよんぬらし生免  
八月乃月乃とささつとつとく  
山乃瑞ふ松と根よのかさ  
まつさるんとさつとく

全 水 全 水 全 水 全 水 全 水 全 水

早き白や後りけ斗引むす  
太鼓乃きま溜子のあるり  
ころくくと持てる本質の葉枕  
氣ささ乃とささと毎より  
為やととあぬ鼓と一二年  
夜をつとく信流りとつと  
之方のねむつととささ  
供や乃草鞋と谷をささ  
後くや小橋大系候縁の花  
人ねひよりけり乃川岸

全 水 全 水 全 水 全 水 全 水 全 水

月さのあも風とさ乃早きあも

抄冊(ろ)の柄をさしつゝハよきと因於

宗澄法師乃白とすむ一とよ夏の

秋乃疾とありしを浮るやんつきぬ

月よ柄をさしつゝハよきと因於

板乃柄をさしつゝハよきと因於

とつろを流し垂るゝとつろかん

行母いかりあきこせあきの夜

甚あねつ久く存てよりかな

使乃者よ返りしつゝあよとれ

あれとれと猫乃子を避るまよ

とつろをさしつゝハよきと因於

とつろをさしつゝハよきと因於

〇一八

すまねりつゝハよきと因於

大勢乃人よ法華とさされ

月の夕よ釣瓶縄了川

管上柳も又うの柳も管上

秋のりききれ細みよ

りつろをさしつゝハよきと因於

寐するゝ書らあまのゆくむ戸

花乃花よとつろをさしつゝハよきと因於

とつろをさしつゝハよきと因於

うち強き浦の昔を乃以て

内へをりつゝハよきと因於

碎さぬぬの飲さきせあれや

人

同

下

同

人

同

下

同

人

同

下

同

裁人

傘下

同

人

同

茶

下

同

多くあつた。雨乃降也  
 歌合獨古鎌着まのり  
 かくて秋を乃こふちかひり  
 灯其乃油を布して押さく  
 白とねをせまきりくはと  
 多く風を急のころまのり  
 半ハこんん能や乃秋  
 ちつくと有る秋の秋に似て  
 人の性まハくもれ  
 にまうく瓜や直せあひせ  
 下せ海を乃ころ小町中  
 ねろく小波乃若の豆付分

人 下 人 下 人 下 人 下 人 下 人 下

〇イ九

皆 同 言 子 ナ 念 佛 人  
 百 葉 し くの ひ 不 と 花 を ま 夫 人  
 田 樂 ま ね ね 様 附 け き 人

保川の歌

厚くもあつた。ひまや  
 海を乃油を布して押さく  
 白とねをせまきりくはと  
 多く風を急のころまのり  
 半ハこんん能や乃秋  
 ちつくと有る秋の秋に似て  
 人の性まハくもれ  
 にまうく瓜や直せあひせ  
 下せ海を乃ころ小町中  
 ねろく小波乃若の豆付分

人 下 人 下 人 下 人 下 人 下 人 下

医乃杖をさし世目するなり  
 いとういと降走のたよりまき  
 鹿よりせほ毛く孝乃泣より  
 け里よりたより言蕃れ名をう  
 只結とうせぬ雨乃あまきの  
 まきぬしやあまのうをくあて  
 う歩ひまはゆよあまのうく  
 りもつうたまの山橋もまきぬ  
 抱つとくまきい母結くしり  
 舟とくたはらぬ乃根をう  
 ちを花は入つとくらの肌ぬき  
 破き戸の釘うち付るまの未  
 越人 芭蕉 越人 芭蕉 越人 芭蕉 越人 芭蕉 越人 芭蕉 越人 芭蕉

〇一十

尺をさしとひしきまのひまはら  
 ちあくく服紗よりむす言談  
 そのけりひぬる神子の抱ひ  
 人まきくいまは法坐の白ひる  
 初彫る名籍る堂乃片隅  
 印とまきぬの氣のあはく  
 垣越のさしけ産るはたけ  
 あやしくふれ小妹々夕あう  
 何の雪うとたうあまこつ  
 け舟のさしめを先消さるに  
 破も遠く鞆より糸あうり  
 秋乃田をわしぬぬまのちひま

蕉人 蕉人 蕉人 蕉人 蕉人 蕉人 蕉人 蕉人 蕉人 蕉人 蕉人 蕉人

さし(あ)り(る)文字(同)なり(る)。  
 い(り)く(る)瓦(底)乃(末)葉(也)。  
 誰(を)ま(る)子(乃)應(え)う(い)ふ(さ)。  
 印(の)は(控)え(義)未(だ)く(ら)う(ら)。  
 田(中)一(と)う(く)野(き)く(ら)。  
 世 人 蕉 人 蕉

菊(花)付(け)を(れ)て(あ)ま(の)は(つ)き(き)。

菊(花)乃(末)葉(也)の(文)や(天)津(丁) 其(角)  
 二(也)さ(の)月(又)は(雲)を(り)り(り) 載(人)  
 菊(花)の(底)を(ま)と(引)つ(り)て  
 然(る)く(り)も(り)し(る)を(あ)ま(ら)る(る) 全 角  
 誰(を)ま(る)子(乃)應(え)う(い)ふ(さ) 全 角

〇一十一

蓮(き)き(り)ま(す)く(ら)う(つ)ま(の)も(の) 全 人  
 恒(と)く(る)候(た)う(く)も(り)ま(ん)て  
 靜(湯)茶(の)舞(を)ま(る)し(る) 全 角  
 空(解)の(誰)魂(の)炊(乃)は(を)り(り) 全 人  
 あ(く)ふ(り)り(る) 今(二)万(也) 全 人  
 い(く)お(き)子(を)他(人)も(名)身(ま)り 全 角  
 や(け)と(ま)と(る)て(る) 今(二)万(也) 全 人  
 沼(裏)さ(母)又(つ)き(き)も(り)ま(ん)て 全 角  
 魚(を)ま(る)つ(る)ぬ(月)の(印)の(舟) 全 人  
 そ(笑)り(り)の(室)は(後)黄(秋)の(言) 全 人  
 ち(し)こ(り)も(り)草(乃)一(瓶) 全 角  
 饅(頭)を(る)れ(る)被(つ)て(る) 全 角



こゝのあゆむ牧まゝらぬ果のふ  
川越らねて城下のこゝち  
瘡瘻負の透とるや露の星  
唱言ハ去る声なりや  
ふゝみゝてあはれぬまきまき  
後をいよゝりよゝりてあき  
とねらるも仲あつてまきまき  
竹燈をこゝちへる浪人  
恙抱を懐くこゝちへ脱  
唯月を懸てる月の月影  
去る家の祥ては女の女  
つぎふの医者者乃後登や

人 全 人 越 言 嵐 人 越 日 者 全 人 全

〇イ十三

ちゝるあゆむ月をこゝちへる  
よゝこゝちへる何をこゝちへる

人 我

初を言てこゝちへる相のあ  
日のあゆむ月をこゝちへる  
山川や霧の空あつて  
紗を遠かゝるこゝちへる  
ね無よまよ押合ふま草は  
あゝこゝちへる  
川越のあゆまされ秋の雨  
ねあゝ痛ろ顔のまきこゝちへる  
けうせこゝちへるあゝこゝちへる

舟水 落梧 全 舟水 水 梧 水 梧 水

とのけきありふはのりききり  
 あり秋の湯をむらうと水飲て  
 こころり都をとおはせぬ 傍  
 峯乃のまわちふわたりと見せり  
 旅さしぬうちめいん 幸多難さ  
 幸少のまふあはれととも一文字  
 下戸ハ皆いく月めねるるき  
 耳や蓋やとては花の散るを  
 とて免れさせたりし乃初年  
 いつやも常守ぬ此は行くに  
 山伏作り人まうはあり  
 ころりくととていぬりては茶車

〇イナ

格水 日 格水 格水 格水 格水 格水 格水

挑灯 ころりては園をさす  
 海よりとほり人髪を振おろし  
 去りておといぬつれあはさ  
 とつりてとやう馬よりさめせ  
 うは府中江船編みさし  
 雨やとて雲のらきる、面かや  
 柳あさくや 例の葉る  
 朝ふく肉くそさつれみする  
 寂しよふ秋を女夫と病さしり  
 ちをよ上るよはささるよや  
 未茶りてとふれいあへの濁  
 教りとの干更ゆるとりけさ

格水 全 水 格 同 水 格 水 格 水 格 水



詩よりを先へんくくくく  
まもるくくくくくくくくくく  
移りくくくくくくくくくく  
水

一里乃山岸愛多しつるくく

かきひの先の瓶水る 朝 龍潭

さきくくくくくくくくくく 胡及

肩名とつれほよよよ人 七七

夕月の入き良早き塘さハ 龍潭

たつくくくくくくくくくく 秋 一井

里海く 踊きよ二三 日 七七

まじり妻よわらわられて 夏 胡及

一井

同くれも勝よ地のさくき 一井

首を移くくくくく切わくく文 龍潭

くくくくくくくくくくくく 胡及

さしゆくくくくくくくくくく 七七

くくくくくくくくくくくく 龍潭

吟くくくくくく女中一子 利 一井

浦風よ 腔吹まくる月除く 七七

みるもかきくくくくくくくく 胡及

美者のだくくくくくくくくく 一井

蒜くくくくくくくくくくくく 龍潭

けるのくくくくくくくくくく 胡及

愛り子乃 錦乃 浜よ 居つて 七七

とうす... 内... ほう

一井

... ほう

一井

... ほう

一井

... ほう

一井

... ほう

一井

... ほう

一井

... ほう

一井

... ほう

一井

... ほう

一井

... ほう

一井

... ほう

一井

... ほう

一井

〇一十

板... 溜... 乃内  
... ぬ...  
ぬくく... 日... 乃...  
... 乃...

一井

一井

一井

一井

我れをいふ道 雲をゆく千念は浪波  
 目けを嵐山乃玉波をうらもあきらむる  
 よふあられれ 雲波をえく君は山はぬく  
 ぬくもあもあふく 心は屏所のあ  
 づかぬもあふく 心は屏所のあ  
 とはけはくく 心は屏所のあ  
 らふれはくく 心は屏所のあ  
 雲をゆく人あふく 心は屏所のあ  
 世小枝乃玉波をうら 心は屏所のあ  
 蜀人もあふく 心は屏所のあ

〇一十七



乃とあはよしとていふもまじふに  
うらなひをいふもまじふに  
あはれとていふもまじふに  
あはれとていふもまじふに  
あはれとていふもまじふに  
あはれとていふもまじふに  
あはれとていふもまじふに  
あはれとていふもまじふに  
あはれとていふもまじふに  
あはれとていふもまじふに

大膳被主人より

長内丸は

